

軍 事 史 学

第 59 卷 第 4 号

卷 頭 言

沖繩戦と日本人

横山久幸

「沖繩県民斯ク戦ヘリ 県民ニ対シ後世特別ノ御高配ヲ賜ランコトヲ」という一文、特に前段はよく知られ、本誌の読者であれば説明を要しないと思います。これは太平洋戦争末期の沖繩戦において沖繩方面根拠地隊司令官大田實海軍少将が、昭和二十年六月六日二十時十六分に海軍次官に宛てた電文で、米軍の沖繩侵攻以降の県民の献身的な作戦協力と生き抜く苦悩を伝え、最後にこの一文で締めくくっています。こうした沖繩県民を支えたのが、二十年一月に着任した島田毅沖繩県知事です。島田は戦時下であっても、「住民を飢えさせてはならぬ」との決意をもつて軍事作戦協力を含む戦場行政を推進しました。殉職した翌月の七月九日付の内務大臣による賞詞には「庁員ヲ督シ県民ヲ率イ困難ナル状況下全力ヲ竭シ」とし、島田の現地の活動状況を送った報告電に対して「将来ノ施策ニ裨益スル所勸カラズ」と評しています。この「将来ノ施策」とは目前に迫った本土決戦を意識した言葉ですが、国土が戦場となれば多数の非戦闘員が巻き込まれる状況は時代・地域に変わりなく、今日でも通じると思います。

第五十七回年次大会は当学会として初めて沖繩で開催したものであり、沖繩ならではの個人研究発表として、郷土史家の方から「中城人が見た沖繩戦」と題した聞き取り調査に基づく報告を頂きました。残念ながら本号に投稿頂けませんでした。戦場となった中城の人々の疎開に関する調査では、北部へ避難した人々が餓死とマラリアに苦しみ、また軍と行動を共にした人々も戦いに巻き込まれ、そうした人々は戦後頑なに黙して語ろうとはしなかったそうです。元寇以来の国土防衛戦であり、軍官民一体となった沖繩戦の教訓は、今日の国家防衛のあり方に示唆するものが多く、住民保護のみならず戦場行政の視点からも研究が進展することを望んでいます。

沖繩戦のもう一つの特徴は、第一航空艦隊司令長官大西瀧治郎海軍中将をして「統率の外道」と言わしめた航空特攻を始めとする海上、水中、空挺特攻、そして「大和特攻」といわれた特攻作戦です。こうした異常な作戦が常態化していった背景には、国土防衛戦を通じた当時の日本軍人の心情に負うところが大きかったといえます。沖繩特攻を指揮した第六航空軍司令官菅原道大陸軍中将は二十年六月二十日の日記に、第三十二軍の決別電報を受領した際に「嗚呼万事休す」「訣別電を写し報告を熟読す……訣別の辞を読み断腸の感あり」と記しています。六航軍は沖繩作戦ではなく戦果を度外視攻撃のほか末期には重爆による物量投下を行っています。戦局を左右するのではなく、戦果を度外視したものでした。特攻作戦による、国土防衛戦において追い詰められた日本人の真情の発露として、そのメンタル面がよく語られますが、軍人個々の心情面だけでなく、軍事的合理性も合わせた相対化が今後の研究の課題と思われれます。

(軍事史学会副会長)